

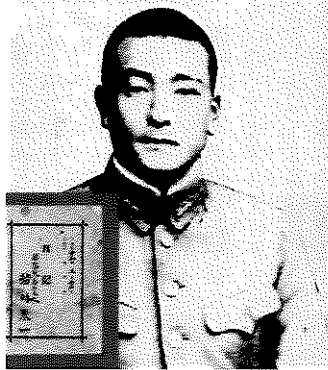
若林東一中隊長

教育問題プロジェクトチーム

榎本 眞己 陸自71

1 はじめに

陸上自衛隊の幹部となるには、福岡県久留米市にある幹部候補生学校を卒業しなければなりません。この幹部候補生学校のグラウンドの南西隅に「見晴台」という小高い丘があります。この「見晴台」という名称は、大東亜戦争のガダルカナル島（以下、ガ島という）の戦いにおいて「後に続くものを信ず」との言葉を残して戦死した中隊長若林東一大尉（戦死に伴い特別進級）の守備陣地「見晴山」から名付けられたものです。では何故、この幹部候補生学校に「見晴台」が築かれているかですが、それは将来部下を率いる幹部



遊就館展示物（左下は若林の日記）

となる候補生を教育する場所として、「後に続くものを信ずるといふ先輩に応えるのは、我々である」といふ使命感を育成する上で最適とされているからです。

このように現代の陸上自衛隊幹部養成の訓育にも活用されている若林中隊長は一兵卒から難関を突破して士官となった方であり、中隊長として個人感を2度も授与され（2度も受けた軍人は若林中隊長のみ）、死後は軍神として仰がれました。

しかしながら若い頃の一時期は凡庸な青年でした。それが、徴兵後に心にも期すところがあり、このような立派な方になられたのです。

そこで今回は、この若林中隊長の少年時代から軍隊に入隊するまで、軍隊に入隊してから中隊長となるまで、そして中隊長時代の活躍をそれぞれ見てみましょう。その後、何故凡庸な青年がこのような軍神と仰がれるような名中隊長となったかを考えてみましょう。

2 軍隊に入隊するまで

若林東一（以下、東一という）は、明治45年（1912）3月27日、父若林宏明と母ハルの三人の子供の次男として山梨県西八代郡栄村内舟という山村で生まれました。しかし長男は生まれて直ぐに亡くなりましたので、実質

は長男のようなものです。直ぐ下には花子という妹が居ました。

栄村内舟は現在では富士川の対岸の南部町と合併し、山梨県南巨摩郡南部町となっています。この栄村内舟は山村の小さな町であり、中央線の甲府駅から約一時間半の里程にありました。

父は当初、栄村役場の職員でしたが、能力が高かったために27歳の若さで身延町電灯会社の事務長に引つ張られ、一家そろって身延町に移り住みます。しかし東一が小学校2年生になった時に身延電灯会社が静岡電業会社と合併することとなり、栄村に帰ってきました。そして自ら製糸業の合資社を興します。

小学校時代の東一は、学校の成績は優秀で性格も明るく、しかも体も大きく負けん気も強かったので友達から人望がありました。すくすくと成長した東一は小学5年生の時に当時新設されたばかりの身延中学の第一期生として入学しました。新設されたばかりですので、近郷の若者がこぞって入学し、中には20歳近い人まで居ました。幼い頃の年齢差は大ですが、東一はこれらの人たちに伍し、全科目優秀な成績を収めます。

工場が折からの製糸暴落により破産状態に陥ります。また母は極めてきつい性格の人であったために甘えることもできませんでした。東一はこれらのことから、さつぱりと勉強をしなくなり、成績も急激に落ちていきます。このため昭和3年の卒業時には同級生60名中40番くらいの成績でした。

中学を卒業する時、将来設計をどのように考えていたかですが、学校が書かせた「将来の希望」に東一は次のように書いています。「政治家または実業家を志望しますので、静岡高校を受験します。もし合格しなかったならば会社か商店の小僧になり腕一本で叩き上げる覚悟です」

これは後に父が栄村の財政がひっ迫していることから、自ら栄村村長を2期にわたって務め赤字続きの村の財政を建て直します。このような血を受け継いでいたため政治家か実業家になろうと考えていたのだろうと思われます。当時の同級生も彼が軍人になるとは誰も考えなかったと言っています。そして中学を卒業し、予定通り静岡高校を受験しますが不合格となります。しかも翌年も不合格でした。そこで父の勧めもあり、木炭の品質を統一するため林務署に置かれた木炭検査員となります。その後、森林組合に勤め林道工事の事務方を行います。

しかし軍隊へ入営するまでの約5年間、希望が挫折したためか、酒を飲み憂さ晴らしをして自暴自棄のように過ごします。この頃は未成年でも飲酒をすることを咎める風潮はなかつたようです。

3 中隊長になるまで

当時、20歳に達した成人男子は全員徴兵検査を受けることが義務付けられていました。4月〜5月頃に通知が届き、地元の集会所や小学校などで検査が行われ、検査に合格した者は翌年の1月10日に最寄りの聯隊に入営することとなっていました。

若林東一（以下、若林という）も20歳になるや徴兵検査を受けることとなりました。結果は見事甲種合格で、昭和8年1月に甲府にあった第1師団歩兵第49聯隊に入営しました。徴兵勤務の期間は2年間で、勤務が終われば予備役に登録され除隊するか、軍人を職業として選択し下士官になるかのいずれかを選択しなければなりません。

彼の中隊長は中島利男大尉でしたが、一生懸命努力する若林を見て、まづ下士官となり次いで将校となる事を勧めます。若林も軍隊に入隊したからには将校となろうと考えます。

そこで彼は甲府県立病院に勤務する身延中学の同窓でもあった従兄の佐野

一男を訪ねて、この決意を相談します。彼もその周囲の人達もそうする事を勧めます。

通常、陸軍将校となるためには、陸軍幼年学校（満13歳から15歳までの採用試験合格者）に入校するか、中等学校から陸軍士官学校予科（満16歳から19歳までの採用試験合格者）へ進むかの二つのコースのどちらかでした。

一方、兵から将校となる道は非常に険しく、まづ下士官候補者となり、下士官にならないければなりません。そして中等学校の出身者と一緒に陸軍士官学校予科の試験を受け合格することが必要でした。もちろん試験の成績が悪ければ振るい落とされます。しかし24歳まで受験できるということが、このコースのメリットでした。この険しい下士官から陸軍士官学校予科への合格者は毎年わずか2〜3名でした。しかし若林はこのコースで陸軍将校になる事を志したのです。

その第一歩として入営した年の12月に下士官を養成する仙台陸軍教導学校に入校します。教導学校とは入営後1年で選抜された者を約1年間の教育で下士官に養成する歩兵科の教育機関で、仙台、豊橋及び熊本に置かれていました。若林は、翌昭和9年11月にこの仙台陸軍教導学校を卒業します。その成績が抜群であったことから教育総

監賞を受賞します。

そして同年12月に陸軍伍長・歩兵第49聯隊付になります。

翌昭和10年4月に天津駐在歩兵隊へ転属し、実地経験を積みながら12月には軍曹に昇進します。

そして1回目の受験で陸軍士官学校予科の試験に見事合格し、昭和11年4月に念願叶い24歳で入校します。

このような時、父宏明はかねて療養中でしたが、息子の晴れ姿を見ることなく他界します。しかし父の死にもかかわらず、卒業に際しては成績優秀により恩賜の銀時計を下賜され、御前講演の光栄に浴します。昭和13年2月に陸軍士官学校本科（陸士52）に入校し、翌14年9月に首席で卒業します。そしてこの時も成績優秀により恩賜の銀時計を下賜されます。そして11月に陸軍少尉に任官し、大陸戦線の歩兵第34聯隊付となります。軍隊に入営してわずか6年と半年余り後のことです。

昭和15年3月には大陸での戦闘に参加していた第38師団の歩兵第28聯隊に転属し、12月に陸軍中尉に昇任し、同聯隊第3大隊第10中隊長を拝命します。

4 若林中隊長の活躍

(1) 香港攻略戦

中隊長を拝命した若林は、来る香港攻略戦に備え、実戦さながらの日夜厳

しい訓練に明け暮れます。しかも厳しい訓練をしながらも部下を労ります。このため部下も若林中隊長を敬慕し、中隊の士気の高さは群を抜いていました。

また大隊長西山遼少佐も若林中尉に感心することばかりで、周辺の者に「実に良い部下をもった」と自慢していました。

香港はアヘン戦争により英国領となり、英国の極東政策の根拠地として発展を遂げ、世界有数の大国際港になっていました。さらに同島は、昭和12年の支那事変勃発以降、中華民国と諸外国との連絡窓口となり、物資の中継基地、あるいは宣伝、謀略の基地として重要な地位を占めるようになります。

昭和15年6月、日本軍は九龍半島における英国と中華民国との国境を完全に封鎖します。そして昭和16年11月6日、対英国軍との戦闘を念頭に置いた南方作戦準備発令とともに、香港攻略準備を發します。

12月8日に大東亜戦争が勃発し、香港島の攻略も開始されます。この攻略戦には第23軍があたることとなり、その地上攻撃部隊の中核が若林の所属する第38師団でした。この時、問題になったのはイギリス軍が九龍半島を遮断するように構築していたコンクリート製のトーチカ陣地をどのようにして攻略するかであり、第23軍は砲兵の展開と

ともに約1週間の攻撃準備射撃を続けることとし、攻略に数週間を見積もっていました。

ところが開戦翌日の9日の夜、歩兵第28聯隊の尖兵中隊長若林中尉を指揮官とする斥候は、陣地を守るイギリス軍が油断していることを察知するや独断で突入し、九龍北方の敵陣地に潜入し、唯一の水源となる城門貯水池の南方高地を占領してしまいます。土井定七聯隊長もこのことを承知するや、直ちに攻撃を命令して主要な高地を占領します。これがきっかけで日本軍は当初の予想に反し、真面目な敵の抵抗を受けることもなく九龍半島全部を占領してしまいます。

この独断専行は、第23軍内で問題となり、「聯隊長土井定七大佐はじめ若林中隊長を軍法会議にかけよ」との声が出ます。しかしまず香港島を完全に攻略してからと先送りしている間に、昭和17年1月香港方面陸軍最高指揮官酒井隆中将から若林の所属する西山大隊と協力した若井工兵小隊に部隊感状が出されたことにより、うやむやとなつてしまいます。

いづれにしても、この若林の独断専行という行為に至る戦機眼は凡庸では成し得るものではありません。それは大所・高所に立ちつつ広い視野を有していたから成し得たものです。

このような力をどこで涵養したかですが、それは彼が陸軍士官学校に在学している頃から身に付けるべく努力していたことが、当時の日記からわかります。

「洞察力ノ養成ニ心掛ケベシ、同一水面ニ絶エズ喘ギ居テハ洞察スルヲ得ズ、常ニ大所高所ヨリ物ヲ見、一歩前シテ後ヲ振り返ヘル余裕ヲ持ツベシ
芭蕉ノ句アリ
馬ほくほく我を絵に見る那須野かな
我ヲ絵ト見ル境地マデ到ラズトモ時折ハ我が鏡ニ見ル程度ニマデ自己ヲ諦観シ前進ノ原動力トナスベシ」(昭和13年3月17日)

きつと、このような普段からの洞察力の鍛錬の結果が、英軍の油断という戦機を看破しての行動となつたのでしょう。

(2) ガダルカナル島の戦い

ガ島は、米国と豪州との連絡線を遮断する一環として、日本海軍が同地に飛行場を設営していました。その不意をついて昭和17年8月7日に米海兵師団が上陸し、建設中の飛行場を奪取します。このため海軍は連日基地攻撃を行います。そのためにも、第8艦隊を行い、猛反撃するとともに、第8艦隊を以つてガ島の米艦隊を夜襲します。その結果、米攻略部隊は一時ガ島水域から退避します。この報告を受けた大本営は状況を樂觀視し、一木支隊を18

日に急送します。そして同隊により21日に夜襲しますが、米軍の組織的な抵抗にあい壊滅してしまいます。直ちに川口支隊が9月7日までに駆逐艦による輸送でガ島に上陸します。そして密林を迂回し12日に夜襲を行います。敵情不明下の攻撃のため撃破されてしまします。

大本営はこの2回の失敗に鑑み、米軍に優越する戦力で撃破することとし、第2師団を10月初から、その後第38師団を11月に逐次投入します。しかし制空・制海権を奪われていたため、輸送船が沈没されるだけでなく、折角上陸した部隊への補給品も十分に揚陸できませんでした。しかも現地は密林と米軍が周到に準備した防衛火力により、本格攻勢が思うように進まず、将兵は飢えと雨季により蔓延するデング熱等の病気に悩まされます。

このため大本営は12月末に至つてガ島奪回作戦の中止・撤退を決定し、昭和18年2月2日〜8日の間に撤退します。若林中隊は第38師団の一員として11月5日にガ島に上陸します。しかし上陸した師団兵力は全兵力の3分の1と攻勢を取り得る状態でないため要点を確保し、じこの攻勢を準備することとします。命により若林中隊は16日に西山大隊の左第一線として「見晴山」を占領します。しかし携行した糧食も11

月末にはだんだんと心細くなつてきます。11月20日の若林の日記に「たとえ迫撃砲がスコールののように落ちようが、爆撃で地を耕されようが恐れはせぬ。私は兵が青く痩せ行くのが見られないぬ。(略) 飢えて飯盒や焚き木を握つたまま俯いて死んでいくような兵を作り度くない」と書いています。

それでも若林中隊は中隊一丸となり、まさに餓島と言われたような飢餓と疾病と闘いながら、与えられた「見晴山」陣地を一步も退かず戦います。そして1月13日夜、頭部に砲弾の破片を受けて負傷した若林中隊長は、戦況報告を兼ね最後の別れを告げに大隊本部を訪れます。西山大隊長はやがて軍の中樞を担うべき将来ある男と考え、再三治療のため後退するよう説得します。

しかし若林中隊長はにっこりと笑つて次のように答えます。「大隊長殿、言葉を返してすみませんが、私は生きながらえて偉くなるうなどという考えは毛頭ありません。私の持つて一切を天皇陛下に捧げ奉らうとして私は戦つていなのです。私は神国日本の天壤無窮を信じます。私は大東亜戦争の必勝を信じます。私は後に続くものを信じます。香港以来私を中心として戦い抜いた中隊の兵と一緒に死ぬのが私の唯一の願望です」と言い残し、兵の助けを借り、最前線の陣地に戻ります。

そして翌日の昭和18年(1943年)

1月14日、見晴山で愛する部下とともに30歳の若さで戦死しました。

この間の戦いについては戦死後に授与された個人感状に詳しく書かれていますので、見てみましょう。

第8方面軍司令官の今村均大將が昭和18年5月1日に与えた個人感状には次のように書かれています。

「香港攻撃戦にありては、戦機を觀破して、敵陣地の鎖やく(注：戸締り)を奪取し、以て全軍戦勝の基を拓き、またガダルカナル島作戦にありては、瘴癘(注：特殊の氣候や風土によつて起る伝染性の熱病)艱苦を克服し、或いは寡兵をもつて死地に進み優勢なる敵を撃破し、或いは峻烈なる敵の砲撃のもと孤立せる陣地をよく長時日に巨り固守するなど軍の作戦に寄与するところ頗る大なるものあり(後略)」

また昭和18年2月11日に百武晴吉第十七軍司令官が与えた感状の最後には次のように書かれています。

「中尉の激烈なる責任觀念と職責に邁進する鞏固なる意思とは軍人精神の精華を遺憾なく發揮せるものにして、また沈着豪胆なるその指揮はよく長時日に巨り優勢なる敵を阻止して軍の作戦を有利ならしめその武功拔群なり仍て茲に感状を授与す」と。

5 おわりに

小学校時代は断然その英才を現し將來を嘱望されたが、中学時代には不勉強により「悲惨な末路」(若林自身の言葉)を歩んでいました。それが軍隊に入営したことにより、難関といわれる下士官から將校への道を進もうと誓うのです。若林は入隊した日、「専心奮闘致すべき」ことを誓ったと10日後に母宛の手紙に書いています。

これまで「政治家か実業家になる」と大言壮語するものの、努力を怠り何も成し得なかつたことを悔やみ、これからは自分の力で自分を築き上げようと心に誓つたのです。きつと軍隊の厳しい規律と訓練が若林に転機を与えたのでしよう。それは、未来というものは現在の延長線にあるものであり、現在を最も大切にし、現在を努力するところが未来を築くことであると悟つたのです。

いわばこの時に、若林は自分が将来どのような人物になるべきかを「立志(志を確立)」したのです。

ですから、その努力は並大抵のものではありませんでした。士官学校予科へ入校した時には指導官から「もう十分に励んでいるので、それ以上無理をするな」と注意を受けるほどであり、消灯後は唯一灯りのある便所で学習する等、人の3倍勉強したとのことす。

同期生も次のように語っています。

「彼は生まれながらの英雄ではない。また豪胆な人でもなかつたと思う。むしろ小心なところが有り、上官に注意されたことや、他の人の言うことに気を遣う一面があつた。絶えず努力と修養を重ね、自分を磨くことによつて、あそこまで到達したのだろう」と。

軍隊も皆様が通う学校も集団という組織です。そのような組織の中で「立志」した青年が自分をどのように処すべきかを学ぶ上で参考となる、若林の手紙が残っています。それは若林が陸軍士官学校に在校時に、軍隊に入営する従弟に出した手紙です。

最後に、これを紹介しましょう。

「謹啓(前略)抑々軍隊は戦時の要求によりて成立する所、万事戦闘を以て基準とするは論を俟たざる所なりとは云えど、其の根本精神と生活の容義断じて一般社会と異なるものにあらず。

(中略)参考の為小生の経験に鑑み聊か記するところあらん。

一 率先難に当たれ。然も他人の眼に映ぜざる所に於て、常に最も苦痛なる仕事を敢行すべし。

二 純心淡泊。常に諸事を善意に解釈し明朗なる毎日を送るべし。

千米の早駆をなすともニッコリ笑うべし、脂の取れざる食器を苦心して洗う時もニッコリ笑うべし。

三 上官は絶対に信頼すべし。

心配事、不審の点は順序を経て率直に上官に相談すべし。

四 短期間なれば、ともかくも適当に切り抜けて帰るなぞと姑息なる考えをなすべからず。

積極的に任務を解決し常に第一等の人物となる事を忘るな。

補充兵の一頭も大將のピカ一も変わりなきぞ。

五 身体の保全に注意すべし。

暴飲暴食すべからず。

外出に注意。僚友の選択又然り。

記述し来れば際限なし。人は如何なる場合にも其の立場に全力を傾注すべし。『軍隊なれば』とて何事もなし得ざる人は社会に出て、何事もなし得ざるを知るべし。反面、一生に又と得難き修養の機会なるに想到一意前進すべし。

右に記せるは、独り君に強要する所たるのみならず、目下小生の努めつつある信條なり。相共に軍務に励まん(以下省略)

【参考資料】

- ・『日本の戦争』原書房
- ・『後に続くを信ず』藤田清雄
- ・『栄光よ永遠に』下山田行雄
- ・『軍神若林東一の日記』陸士52期生会内軍神若林東一奉賛会